

あそ

1

2023



寄稿

亀田虎童子

眼鏡買ふ駅もポストも初景色  
榎櫃の実思ひ通りに昏れにけり  
酒飲めば頭の冴ゆる細雪  
おぼろげな記憶に降るは牡丹雪  
重ね着の重ね過ぎたる朝御飯

## 一月集

すこしづつ

佐藤 竹僊

すこしづつ息抜けてゆく秋の庭

コスモスにハガキがとどく鳥渡ゆれ

秋だなど窓のあかりで物を書く

桐一葉ばかりを詰めてゴミ袋

生涯の奢侈禁止令日向ぼこ

三段跳の前に何歩も雁の空

自轉車と人の踏切秋日和

うっすりと雨にまぎれてつづれさせ

夜明といふ驛のあるとか酒温め

歸りには入日に對ひ冬紅葉

水仙のむかふの人をみてゐたる

踏切の脇に寄せられ冬の鳥

茹玉子上手に出来て越年す



小春日

長崎桂子

朝日さし白湯ゆるゆると冬に入る  
昼下り冬の根菜三種煮る  
堤防の小春の温みしばし居て  
小春日や電線に小鳥にぎやか  
枯れ庭に揚羽蝶来る餌あるのか  
霜月の満月満ち欠け上演す  
舗装路に冬の堇の可憐なり  
凧一号来たり用意いそぐ

雑詠

森なほ子

日蝕の過ぎて三日や石露の花  
シャープペンシル芯カチカチと冬に入る  
蜻蛉洲尾まで晴れたり文化の日  
初雪をぺらと乗せたり浅間山  
村人は紅葉の中に暮らしをり  
冬朝日温めてをりぬ壁の隅  
枯葦の隙間に躍る水光  
長き夜や春樹ワールド二頁目



道南四日

赤座典子

街道に千生り柿のこぼれさう  
年用意の工事の多しハイウエイ  
子と孫と同じ神社の七五三  
焼藪の大き壺置く炭屋かな  
着ぶくれて道南ツアーせかせかと  
凍てし道ひたすら見つめ刻み足  
橋桁の太きつららや遊覧船  
雲間より冬日真白く輝けり



冬立てり

秋川泉

残照の富士は黄金に冬近し  
義経の腰越の磯鳥渡る  
音もなく银杏降り敷く阿弥陀堂  
道遠く黄落葉松の果てしなく  
座り込みいやいやする手に千歳飴  
風一陣身をすぼませて冬花火  
鯛焼をかかへ神父のいそいそと  
待たされていよいよ着工冬立てり



秋惜しむ

七郎衛門吉保

路地裏にメンコベーゴマ秋惜しむ

S D C s わかりわからぬ宵の秋

神主も吾子もマスクの七五三

ペンと絵馬セットの袋七五三

新包丁試みに切る花梨の実

清瀬村波郷咳く花梨の実

灯火親し小説「波郷」句の在らず

鯛焼も織部に寝かせ高級魚

今朝の冬

篠田純子

今朝の冬蝶のむくろの千代紙めく

今朝の冬元気な眉を引きませう

長き夜や北の戦地の飢ゑ凍え

寝たきりにならぬ体操夜の長し

天王星月の裏より出でて冴ゆ

信長も賞<sup>め</sup>でしや冬の月赤し

今朝の冬工事現場の怒号凍つ



自由行動

篠田大佳

タナトスのなみだを燃やし初時雨  
AIの描く水星のもみぢかな  
自由行動終へる足取り冬の暮  
つはぶきや馬鹿になりたいときもある  
冬薔薇町の道化は牢に死す



柚子は黄に

須賀敏子

ままならぬ日も有りてこそ柚子は黄に  
綿虫の只一匹を追ひかけて  
吊橋を揺する人あり神の旅  
奉公の愛馬の碑あり冬紅葉  
祖母の墓落葉時雨の只中に  
柿たわわ此れは渋よと言はれけり  
柚子をもぐ梯子八十二の自信  
小春日や一年振りの姉妹



冬日和

都築繁子

冬落暉釣り人ゆつくり帰りゆく  
カフェオレの消えないハート冬浅し  
冬紅葉平らな時間過ごしをり  
冬日和葉脈しかと備前皿  
バスの席譲られ温き冬日かな  
ひとり居の早めの夕餉冬菜漬



## 十一月号作品より

篠田純子・篠田大佳・佐藤喜孝

ぼろぼろの字引買ひ換ふ一茶の忌

亀田虎童子

「一茶の忌」をどう味わうか。流れゆく日常生活から、特別な情を発見するような季語として考えてみました。新しい字引を買った喜びもありつつ、ふと、古い字引の思い出がよぎったのかもしれません。ありふれた日常で終わらせたくない気分が「一茶の忌」に表れています。(大佳)

寒雷や話相手の猫を抱き

亀田虎童子

突然の雷鳴に、顔を見合わす作者と猫です。声をかけると、猫は膝へ来て抱かれます。作者の二言三言に、のどをゴロゴロ言わせて応える猫です。「話相手の猫」に、ほっこりしました。(純子)

犬は猫と違ひ人を蔑む時にも使はれて可哀想。猫の中には毎晩人間様の布団の中に入り込んでわが寝床だと言はんばかりに軒をかく。掲句の猫は雷が嫌ひなのだらう。人の膝に乗り一安心。人も無聊を慰められてゐる。寒雷のおかげである。(喜孝)



ファーストはおさげの子なり冷し水

佐藤竹僊

少年野球の、一塁手はなんとお下げ髪の少女です。数合わせではなく、実力でポジションを勝ち取ったのでしょうか。ファインプレーに感心している、作者が見えてきます。(純子)

極楽の尾ひれは長し金魚玉

佐藤竹僊

抽象的な「極楽の尾ひれ」について、幸せな時間がまだ続くのかなど考えているのかなと想像を膨らませつつ、金魚玉の金魚の尾ひれが長く見えるという光景が見えてきます。抽象から具象が現れるのは、作者の辿ったであろう景の道のりと反対を行く感じがして、逆再生の映像を見ているようです。(大佳)

梨届く付かず離れず元気です

須賀敏子

送られてくる梨の梱包が付かず離れずとも読めそうですが、梨の送り主との関係性を読者に手紙のように伝えているようでもあります。手紙の文体にある独特の温かみが表れていて、それについて、作者の芯が通っている様子もあります。調べも気持ち良いです。(大佳)

曼殊沙華姉は明るい物忘れ

須賀敏子

老いた姉妹の何気ない会話の中で「おやつ」とおもふ。姉の会話の不自然さに気がつかれた妹。初めは心配したが……。 「明るく」は姉へのあたたかい理解が生み出した言葉。曼殊沙華は姉妹をつなぐキーワードなのであらう。(喜孝)

万国旗綻び揺れる秋港

都築繁子

港に張り巡らされている万国旗の華やかさの陰で、細かく観察した時、綻びを見つけた作者。港の大雑把な様子がありながら、秋の季節感が、寂しさをより伝えてくれます。(大佳)

野分あとタワーは青くまばたけり

都築繁子

東京には高い鉄塔がふたつある。ひとつはタワーといひ、ひとつはツリーといふ。この句は東京タワーをおもはれて詠まれた。無事に野分をやり過ごした澄んだ夜空にライトアップされたタワーが青くまばたと詠無。野分が去ってほっとされた心持がつかはる。「またたけり」ではなくこの句は「まばたけり」。タワーへの親近感のようなものも感じた。

衰へぬ草の育ちや秋溽暑

長崎桂子

残暑というべき季節に「秋溽暑」という言葉を当てたのは、収まらぬ暑さへの実感があります。草はずっと元気で、人の身のくたびれた感じと対比されています。(大佳)

溽暑は夏の蒸し暑さをいふ。桂子さんは秋暑しでは済ませられぬ暑さと感じ秋溽暑とされたやうだ。この暑さを恃みにしてまだ衰へをしらぬ草の丈に少々桂子さんはうんざりされてをられるやうだ。(喜孝)

夏果や黒きミイラは守宮の子

森なほ子

一見「黒きミイラ」という不気味なものをよくよく見たら、守宮の子だったという光景です。「夏果」の季語に、夏を越せなかつた小さな守宮へのあわれを感じながら、「黒きミイラ」の比喻によって、今夏の暑さを思い出します。(大佳)

枝豆の胸元に飛び見つからぬ

森なほ子

小さなものが手元からこぼれあはてて探すとおもひもしない所で見つけることがある。まことに不確かな動きをする。莢から飛び出した枝豆。確かここらあたりに飛んだのだがと胸元あたりを探すがない。「跳び」ではなく「飛び」とされたところは作者の狙い?。(喜孝)

夕星や鳥にも秋思あるらしく

赤座典子

夕方になって金星が輝き出す。星の輝きに何か感傷に浸っているような鳥の姿があります。作者は星をじっと見ている鳥の表情に秋思を重ねました。その表情は読者に委ねられます。(大佳)

旅支度終へし子と居る望の夜

赤座典子

この句の「旅」は少々長い別れの雰囲気がある。別離の淋しさを押さえてゐるが、滲み出てくる子への哀惜。小津安二郎の映画のワンカットのやうだ。(喜孝)

一面に月差し入たる鄙の宿

秋川 泉

虫が囁く夜、虫の声もかき消えるほど、窓一面に大きな月が見えます。「鄙の宿」の場面設定も生きていて、見事に隈なき月を想像させられます。(大佳)

名月や提灯を消し畦の道

秋川 泉

現の世ではない幻想の世界とおもった。時代小説の中ではよく、提灯をもち月明かりや星明りの下、歩く場景がよくある。この句、ある所までは提灯を頼りに歩いてきたが、意をもって提灯を消した。ここがよい。楽しいひと時であつたらう。(喜孝)

小鳥にも漫ろく秋の恋心

七郎衛門吉保

小鳥が他の鳥を見ているようです。その様子は漫然と恋心を持っていると詠んだ作者です。鳥の気持ちは秋の空のように明日には心変わりするかもしれませんが、その場ではなんとなく真剣な眼差しを感じます。(大佳)

正倉院写し茶碗に名残の茶

七郎衛門吉保

悠々自適のたつきの様が偲ばれる。正倉院写しの茶碗とはどのやうな茶碗だらう。写しといつても遙かな時の流れの詰った茶碗をたなごころに乗せた名残の茶を楽しまれてをられる。(喜孝)

新涼や光源氏のロマンズ詐欺

篠田純子

恋愛観は時代によつて変化します。若い世代には、恋愛が人生を充足する手段ではなくなったという人も出てきているようです。そのような時代背景のもとに詠まれた光源氏は、甘い文句で女性を口説いているのでしょうか。その「手口」は「詐欺」であり、「新涼」に空恐ろしい感情が秘められています。(大佳)

水撒けば秋蝶秋蜂水飲み

篠田純子

あれは不思議である。ホースで散水をしてみると、どこに見てゐたのか大小の蝶や蜻蛉が寄つてくる。蛭蝶は散水の中に入つてもくる。アスファルトを濡らした撒き水に蜻蛉は産卵を始めるのを見たことがある。掲句はその水を秋の蝶や蜂が飲みに来た。作者の小動物への観察眼、温かいまなざしを知る。(喜孝)

かさぶたのできない心風さやか

篠田大佳

通常身体の傷は、瘡蓋ができ治癒に至るものですが、傷ついた心に瘡蓋ができないと言う心配な句です。爽やかな風にあてて、なんとか薄い瘡蓋が張れば良いのですが。(純子)

天空の塔にとんぼの雨宿り

篠田大佳

不思議な句である。実景とは違ふ存在感のある景が浮かんでくる。「天空の塔」で広大な空間が浮かびその塔で雨宿りをするとんぼ。もしかしたら今はぬめメガネウラかもしれない。雨はきらきら光る明るい雨である。(喜孝)



絶筆は明日か牡丹雪降る日かな 亀田虎童子

\*\*\*

空蟬にならむと艸をのぼりだす 佐藤 竹僊

高層のビルが見下ろす松手入れ 都築 繁子

どんぐりの飛んで転げて広き空

秋桜群れ揺るるひたむきに有りたき 長崎 桂子

あてもなく握る鉛筆夜の長し 森 なほ子

河原辺に小さきコスモスはぐれ咲く

爪切りて終る一日冬隣 赤座 典子



神主に飛蝗のとまる地鎮祭 秋川 泉

山の湯やあまたの星の流れ入る

谷間の稲架に掛け合ふ声響く 七郎衛門吉保

集まって走って食べて運動会

こぼるるもとどまるも紫式部の実 篠田 純子

実むらさき我が身へ作る介護食

秋暮れていま永遠の雨の中 篠田 大佳

十月の山を下りてフルーツパフェ 須賀 敏子

喜孝抄





## 都立青山高校

篠田純子

社会人向けの「都立高校公開講座」の存在を知り、いくつかの講座を受講した。中でも青山高校の「万葉集」の講座に何回か通った。先生は現役の高校教師で、ユニークな話ぶりに惹きつけられた。講義はよく脱線して、歌手志望だった先生は歌謡曲を歌い始める、ダジャレをとばす、寄席のような雰囲気である。

万葉集は勅撰和歌集とは違い、庶民も参加している稀有な歌集とのことで、防人の歌、詠み人知らずの歌など丁寧に解説してくださる。しかし青山高校は神宮球場に程近いので、声援がよく聞こえる。「今、

ヤクルト点が入りましたね！」と、また講義は中断する。

コロナ禍で、講座は休講中だが再開したら又、青山高校へ行ってみたいと思っている。

## 青とあを

篠田大佳

高校生の時、化学の問題集の表紙の色が緑か青かで、クラスが二分したことがありました。日本では、信号のように緑がかった青までも青と呼ぶことがあるということを知りました。感覚の言語と科学的な言語は必ずしも同じ説明がされないことは、季語にも言えそうです。

## 種田山頭火

秋川 泉

晩秋の故郷の村を二万四千歩も歩いた。昔の面影を求めて村はずれの切通に差し掛かったころには、もう闇が迫っていた。長い切通は、向こうの出口が、薄青くぼーっと見えた。

『分け入っても分け入っても青い山』。この句が頭から離れなかった。薄い青は、刻々と深みを帯びて、暗く大きな闇に変わろうとしていた。切通はなおも続く。昔の旅人が、暮れる山道で心細く山賊におそわれる物語は何度も聞いた。それがこんな風であったのか：と思われる闇の切通。種田山頭火が私の中に入って来る。仏教に帰依すると云う共通項以外は伺えない私とこの俳人。なのに何故、こんなに心臓が吸い寄せられるのか。どう云う人で会ったのだろう。ただ一度で良い。たった一言で良い。言葉を交してみたかった。

## 「あを」の句

佐藤喜孝

あをくさくかたくつめたき螢なれ 竹内弘子

螢を詠むと私は情緒的になってしまふ。多くの方もそのやうだ。掲句は全くそのやうなことに背を向けリアルに詠む。触れた螢の感触を十全に詠まれた。「螢なれ」の止め方に感心。螢の出色の句。

澄んだ空紺碧の海冬椿 赤座典子

多色な作品。ところがよく読むと表に出た色は「紺碧」だけ。あとは読者に委ねて華麗な作品に仕上げている。

あをさぎの夜は念仏を聞きにくる 篠田純子

青鷺の佇む姿は行脚僧に見えてくる。夜の青鷺の新しい魅力を掴まえた作品。

紺碧の空よりどつと銀杏散る 須賀敏子

時を得てどつと降る銀杏黄葉。しかし掲句は黄葉などと色など出さず「銀杏散る」とされた。ここがこの句の上手いところ。

夢

御降や夢かうつつか乳吸ふ児  
この先は入る可からず春の夢  
体中ことに頭髮蚤の夢  
真夏の夜の夢かトーテムポール群  
書漏らすルビ真夏の夜の二度寝の夢  
ひと筋の風を捉へて夏の夢  
諍ひの夢残りをり椿の実  
夢探すルーペが一つ二月雪  
音信のなき友の夢余寒かな  
み仏にまみえる春の夜の夢  
夢の世に木枯偲ぶ花筵  
風邪の熱夢は饒舌な展開  
軽くなる夢風羅坊ハンモック  
これは夢早く覚めるよ鉦叩  
石鱗玉特攻隊の夢を見し  
点滴の夢安らなれ冬帽子  
浅き夢いくつも見るや感冒の夜  
凍蝶のしろがね色の白日夢  
孫の手に大き夢あり初日の出  
春あけぼのこれは夢だと思ひつつ  
我走り母は歩くと春の夢  
みんみんなや夢見心地を突然に

木村茂登子  
田中 藤穂  
東 亜 未  
木村茂登子  
佐藤 恭子  
篠田 純子  
赤座 典子  
堀内 一郎  
長崎 桂子  
木村茂登子  
阿部 寒林  
篠田 純子  
井上 石動  
齊藤 裕子  
佐藤 恭子  
齊藤 裕子  
大日向幸江  
大日向幸江  
大日向幸江  
大日向幸江  
篠田 純子  
赤座 典子  
須賀 敏子

冬ざるる前歯の抜けた夢を見し  
夢の怒り鎮まりてゆく石路の花  
らつきよ漬ける夢みて寝覚さびしめり  
もう五年夢追ひかけよ日記買ふ  
夢の中でモロ一反射す風邪の熱  
悪き夢見ぬ流感や有難き  
とび梅や絵馬の数だけ夢のあり  
紫陽花の七色の夢咲かせけり  
年越しは温泉宿に夢のごと  
人間の夢を見てゐる鳥の子  
夢の左手の届かないソーダ水  
つぎはぎの夢に弟焼きもろこし  
同じ夢語りし友や初電話  
桜桃の棒苗植ゑて夢すこし  
三角の円の面積春の夢  
大王烏賊に追はるる夢へ明易し  
天の川犬猫も夢みるといふ  
身支度の夢を見てゐる十二月  
夢見月瑠璃の世界に誘はれ  
武者飾り時を止めたり春の夢  
巢ごもりて夢の中にも蝶の舞ふ  
空腹のきみの夢見て朝の夏  
紫の夢を咲かせる布袋葵

大日向幸江  
齊藤 裕子  
定梶じょう  
須賀 敏子  
篠田 純子  
赤座 典子  
大日向幸江  
大日向幸江  
石森 理和  
佐藤 喜孝  
秋川 泉  
田中 藤穂  
大日向幸江  
須賀 敏子  
森 なほ子  
篠田 純子  
定梶じょう  
篠田 大佳  
秋川 泉  
大日向幸江  
秋川 泉  
篠田 大佳  
大日向幸江

明け易し古希遠く過ぎてなほ母の夢  
酔客や胡蝶の夢の初句会  
GIの夢遠のきて冬の月  
春眠の夢に自肅はなかりけり  
コロナ終息せば何処へも蝶の夢  
帰宅せる夢を見た日の初涙  
クリスマス猫に叱られてゐる夢  
曾孫たちスキーに夢中といふ電話  
朝の雨琴弾き鳥を夢うつつ  
短夜の夢は短しそして今  
かき氷昨日の夢を追ひて老ゆ  
原爆忌飛ぶを夢みる千羽鶴

森 なほ子  
篠田 大佳  
秋川 泉  
森 なほ子  
篠田 純子  
大日向幸江  
秋川 泉  
田中 藤穂  
秋川 泉  
篠田 大佳  
七郎衛門吉保  
都築 繁子  
赤座 典子  
赤座 典子  
山莊 慶子  
井上 石動

あかんぼの頭ゆらゆら白牡丹  
たなばたに合格の文字ゆらゆらと  
ゆらゆらと芭蕉の作る青い翳  
水澄みて群れる尾鱈のゆらゆらと  
ゆらゆらと優雅に泳ぐ天使魚  
夕風に苦瓜の影ゆらゆらと  
冬暖か軒の鯉鮓のゆらゆらと  
羽閉ぢて地をゆらゆらと冬の蝶  
ゆらゆらと黄蝶高みに余震かな  
ゆらゆらと水中に生り水芭蕉  
竹の春ふはりゆらゆら人力車  
音信を待つゆらゆらと秋の蝶  
西郷像顔に春の日ゆらゆらと  
ゆらゆらと蕊粉零すや百合の花  
初景色昔硝子のゆらゆらと  
山藤の頼りて登りゆらゆらと  
今年又ゆらゆら来たり黒揚羽

佐藤 喜孝  
芝 尚子  
赤座 典子  
長崎 桂子  
森山 のりこ  
長崎 桂子  
赤座 典子  
山莊 慶子  
田中 藤穂  
須賀 敏子  
森 理和  
田中 藤穂  
田中 藤穂  
齊藤 裕子  
佐藤 喜孝  
石森 理和  
長崎 桂子

揺らめく

家路へと火色揺らめく秋落暉  
一人居や揺らめきもせず冬灯  
冬うらら竿に揺らめくベビー服  
オリオンの揺らめき蒼し風の音  
ゆらゆらと深吐息して炎暑の樹  
小春日やゆらゆら揺れる勝鬨橋  
猫の尾のゆらゆらと立つ秋の雲  
飾り窓の文字ゆらゆらと夕立あと  
駿河路の海ゆらゆらと梅雨晴間

田中 藤穂  
篠田 大佳  
森 理和  
赤座 典子  
森山 のりこ

ゆらり

傷み一日ゆらりゆらりと水中花  
日面をゆらり翳らせ黒揚羽  
吊革やゆらりと葱が頭出す  
梅雨間近ゆらりゆらりと飛行船  
吊橋をゆらりゆつくり山桜

堀内 一郎  
鎌倉喜久恵  
芝 尚子  
森山 のりこ  
須賀 敏子

## あとがき 原稿のお願い

### 短文「銀座」

八十歳まで生まれた中野で生活をしてゐた。遊びに行くといへば鍋横・中野駅、よくて新宿、それより遠いところへは余り出かけなかった。行動範囲の狭い不活発な生活をしてゐた。『銀座』へ行くのは大変、まさに銀座は晴の場所、舞台上上がる心地である。無粋な私でも少しは気を使って出かけたもの。一人相撲でつまらぬことに身構へたもの。

銀座のほかに意識して行かなかったところに「下町」がある。訳は分からぬが可笑しいほどに意識した。遠い「パリ」と同義語であった。処女句集『青寫眞』をだうしても手渡したい人がゐた。『暖流』で可愛がってくれた方だ。その人は下町に住んでをられた。意を決してきよろきよろ家の脇にある鉢植を眺めながら下町に入っていったものだ。

もうひとつそんな場所があった。小学校の高学年まで暮らしたところから、歩いて十分ほどの所へ引つ

越した。その時からその町を通るのに数十年の年月が必要だった。私はどんな性格をしてゐるのだらう。BCGが何かの予防注射の痕が膿んできた。小学校の先生に訴へたら「この子は神経質だから」と保健婦さんに伝へた。嫌な気がした。自分は不満だったが本当は神経質なのかもしれない。(喜孝)

### 訂正

十一月号23頁の

随筆『空拳法 秋川 泉』

を欠落しました。訂正よろしくお願ひもうしあげます。

二〇二三年一月号

発行日 十二月二十二日

発行所

〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話

090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)